**これ（学問、道）を知るものは、これを好むものに如（し）かず。**
**これを好むものは、これを楽しむものに如かず（論語・雍也第六）**

開倫塾
塾長　林明夫

１．（１）孔子の教えに、「これ（学問、道）を知るものは、これを好むものに如（し）かず（及ばない）。これを好むものは、これを楽しむものに如かず」（論語・雍也第 6 編）とあります。
（２）この意味は、「（学問、道を）知るということだけでは、これを愛好することに及ばない。愛好するということは、これを楽しむことに及ばない」
＊吉田賢抗著「論語」新釈漢文大系１、明治書院 1975 年改版、140 ページ。
（３）「ある物事について、それを単に知っている者は、それを好む者には及ばない。しかし、それを好む者だって、その物事について楽しむ者には及ばないのだ」
＊須長美知夫著「論語抄」史跡足利学校 1993 年 5 月 25 日刊、38 ページ。

２．（１）「学問を知っているものは、学問を好むものに及ばない。学問を好むものは、学問を楽しむものに及ばない」
（２）「学問を知るものは多いが、学問を好むものはいたって少ない。学問を楽しむものとなると、滅多(めった)にいない」と、（孔子は）慨嘆（がいたん）している。
（３）吉田松陰こそ、その滅多にいない珍鳥、「学を楽しむ者」ではないのか。

３．（１）松陰は、江戸の獄から移された。「野山の獄」は、ひどいところであった。
（２）松陰自身が書いている。「髭（ひげ）は凍り、寒さは膚（はだ）にとおる。太陽は見えないし炉もない。眠っていてもすぐに起きてしまうし、悲しい思いがこみ上げてくる」
（３）この悲惨な境地で、求道者松陰の面目は発揮された。彼は、直ちにこの環境を最大限に活用した。

４．（１）国事に奔走し、海外渡航を企てたりして、しばらく、ゆっくり読書している時間がなかった。今こそ読書だと、入獄早々、一心不乱に読書を始めた。
（２）松陰は、兄杉梅太郎から書物の差し入れをしてもらって貪(むさぼ)るように読んだ。書き抜きをし、感想も書いた。たちまち数十冊を読んでしまって、次々に要求を追加する。
（３）松陰は、この読書を「自ら楽しむ」と、親友米原良三に書き送っている。彼は、獄中のひどい湿気と厳寒の中にあって、読書を楽しんでいた。
＊以上、４～６は、小室直樹著「歴史に観る日本の行く末」青春出版社 1999 年 2 月 10 日刊、102 ページより引用。

５．（１）論語の「知・好・楽」の三字の客体は何を指すかははっきりしないが、やはり、「学問」とか「道」とかを対象にして、その人々のこれに対する態度の浅さ、深さを述べながら、「知よりは好を、好よりは楽を」と念願した孔子の心境であろう。

（２）況（いわん）や、これを知らないものに至っては、孔子のいわゆる「これをいかんとするなきもの」である。

（３）人生に生きるということを知る。生きていくことを好む。生きることを楽しむ。人生を楽しめる人は幸福である。必ずしも富貴にならなくてはならぬということではない。人生を楽しめるような人間になりたいものだ。

＊吉田・前掲書、141 ページ。

＜コメント＞

学問や道、人生に対するこのような基本的態度は、どのように育くまれたのか。その時々の「教育者」の果たすべき役割の大きさを考えたい。

2019 年 2 月 25 日(月)林明夫